

教師との関係形成における児童の主体性が 学級適応感に及ぼす効果についての予備的調査 —道具性と情緒性の 2 機能を考慮して—

○弓削洋子 (愛知教育大学)

齋田裕香 # (名古屋市立常安小学校)

キーワード: 教師-児童関係, 学級適応感, 道具的関係

問題と目的

教師-児童生徒関係研究は, 教師による配慮や支援など教師主体の情緒的関係づくりに焦点を当てている。しかし, 学習活動の成立と児童生徒の学級適応の上で, 児童生徒も主体的に関係づくりに関わる相互依存的関係にあるという (Jenkins, 1951)。相互依存的関係とは何かについて, 児童主体の関わりと関係の機能 (道具性, 情緒性) に注目し, 学級適応感への効果から関係性を考察する。

方 法

調査対象と時期 A 地域小学校 3 校 4, 5, 6 年生 429 名 (男子 200 名, 女子 224 名, 不明 5 名), 2016 年 10 月。

尺度構成 すべて 5 件法である。

1. 教師-児童関係尺度 項目については, 主体性の所在 (教師/児童) × 主体的関わりの有無 × 関わりの機能 (道具性/情緒性) の組み合わせ計 8 分類になるよう, 先行研究 (e.g., 藤田・森口, 2015; 越・西條, 2004; 弓削・松田, 2003) を参考に作成した。専門家 4 名で項目をチェックし, 最終的に 6 分類計 24 項目になった。

2. 学級適応感尺度 浜名・松本(1993), 江村・大久保(2102)の尺度を参考に, 最終的に 12 項目を使用した。
3. 担任教師への適応感尺度 4 項目作成して評定させた (e.g., 先生といくと落ち着く, 安心する)。

結 果

1. 教師-児童関係尺度の分析 探索的因子分析で得られた 4 因子構造 (Table 1 参照) の確認的因子分析の結果, 適合度は比較的高く ($\chi^2(114)=269.5$, $p<.0001$, CFI=.96, RMSEA=.06), 教師への適応感尺度 (1 因子) と各因子の相関も全て 0.1% 水準で有意な正相関であり, 妥当性が確認された。

2. 学級適応感尺度の分析 第 1 因子は「安心・充実感」, 第 2 因子は「被信頼・受容感」であった。

3. 教師-児童関係が学級適応感に及ぼす効果 学年を集団単位とした多母集団同時分析の結果 (Figure 1 参照) は, モデルの適合度が高いことを示した ($\chi^2(9)=17.8$, $p<.05$, CFI=.99, RMSEA=.08, SRMR=.025)。

考 察

全学年で, 教師主体の情緒的関わりは児童主体の関わりとともに学級適応感を高めている。一方, 道具的関わりは, 4 年生では教師が主体となって児童主体の情緒的関わりを介して学級適応感を高めるが, 6 年生ではその主体は児童に取って代わられる。教師は情緒的関わりの主体のみである。教師から児童への情緒的関わりと児童から教師への道具的関わりによる相互依存的関係の意味を, 今後検討する必要がある。

(本研究は科研費基盤 C [16K04299] の助成を受けた)

Table1 探索的因子分析における因子負荷量と因子間相関					
		因子1	因子2	因子3	因子4
因子1 教師主体の情緒的関わり $\alpha=.88$					
教主情1	先生はわたしに優しく声をかけてくれる	0.87	-0.02	-0.06	-0.01
教主情2	先生はわたしをほめてくれる	0.86	-0.03	-0.01	-0.03
教主情3	先生はわたしが失敗しても励ましてくれる	0.84	-0.04	0.06	0.03
教主情4	先生はみんなと同じようにわたしに接してくれる	0.74	0.10	-0.05	-0.08
両主情2	先生はわたしの相談に乗ってくれる	0.47	0.16	0.11	0.11
両主道2	授業でわたしが意見をはっきり言うと, 先生もはっきり言ってくれる	0.46	-0.03	0.09	0.14
因子2 児童主体の情緒的関わり $\alpha=.88$					
両主情4	わたしと先生は気軽に話さることが多い	0.06	0.88	-0.11	-0.03
児主情1	わたしは先生に休み時間, 自分から話しかける	-0.06	0.81	0.05	-0.01
両主情1	わたしと先生はよく相談をする	0.13	0.81	-0.06	-0.03
児主情2	わたしは先生のことをあれこれ聞きたす	-0.19	0.67	0.22	0.06
両主情3	わたしと先生は一緒に遊ぶ	0.10	0.61	-0.05	0.00
因子3 児童主体の道具的関わり $\alpha=.75$					
児主道3	わたしは, 先生が間違っていたら教えてあげる	0.00	-0.02	0.78	-0.03
児主道2	授業でわたしは先生の知らないことや気づかないことを先生に教えてあげる	0.02	0.01	0.74	-0.02
児主情4	わたしはクラスのことで先生が知らないことを話してあげる	0.09	0.30	0.40	0.00
因子4 教師主体の道具的関わり $\alpha=.65$					
教主道3	わたしは, 先生の言うことを聞いていたほうが楽だと思う	-0.04	0.00	-0.07	0.85
教主道1	わたしは先生の話をしてから行動するほうだ	0.05	-0.09	0.03	0.53
教主道2	わたしは, 先生が周りの人を注意してくれると安心する	0.06	0.10	-0.01	0.48
最尤法, プロマックス回転		因子間相関			
		因子2	因子3	因子4	
		0.63	0.46	0.63	
		0.51	0.32	0.19	

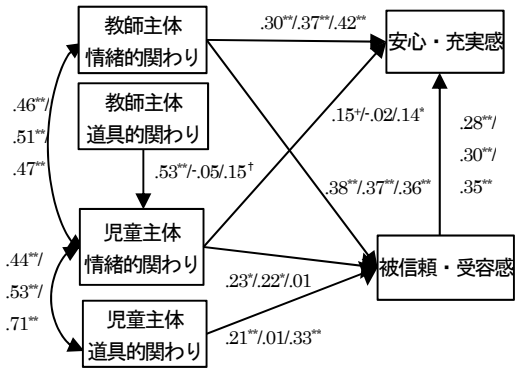


Figure1 多母集団同時分析パス図(パス係数は, 4 年/5 年/6 年)